

煎茶図録における煎茶席の室内意匠について

○ 正会員 北岡秀和 *1
同 麓 和善 *2

はじめに

江戸時代中期に売茶翁高遊外(1675-1763)によって確立された煎茶は、文人墨客に引き継がれ、文化・文政期以降大正期にいたるまで知識層に広まった。前稿¹⁾では、悉皆的に収集した煎茶図録27本に描写されている煎茶席の平面構成において、席の性格・時代・地域による特徴がみられることを指摘した。本稿では、さらに同史料に収録された挿図を対象として、床・床脇(棚)・付書院・戸口・窓・高欄等室内意匠について考察したい。

1 床

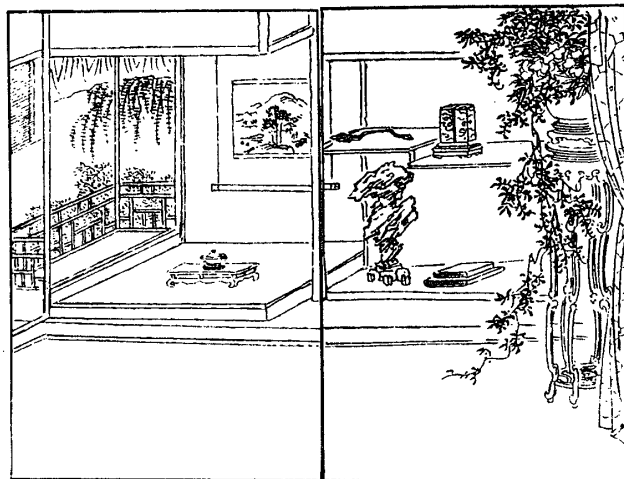
全27本の図録に収録された挿図の総席数は256席あり、そのうち床の描写があるのは248席である。床の形態を框床・踏込床の2つに大別・集計すると、框床204席(82.3%)、踏込床44席(17.7%)となり、框床が圧倒的に多い。床脇壁をみると131席に開口がみられ、開口の種類には狛潜り・窓などがある。また床脇壁がなく床と床脇が一体となっているものもある。床柱には奇木がよく用いられ、如意・拂子・数珠などの佛具が掛けられる。また床には香具・花具が多く飾られている〔図1〕。以上、床の意匠は、全時代・地域を通して同じ傾向にある。

2 床脇(棚)

床脇の描写は105件ある。床脇の意匠上、棚は重要な要素であり、図録には違棚をはじめ各種の棚が描写されている。これらの棚を江戸・明治期に刊行された建具雛形を参考に、〔表1〕のとおり分類・集計した。その結果、総件数が52件と少ないわりに種類が豊富なため、席の性格・時代・地域による差異はみられない。最も描写数が多いのは違棚で13件(25.0%)ある。しかし、錦葉棚(8件-15.4%)・書物棚(7件-13.5%)・文道棚(6件-11.5%)・鯨棚(3件-3.8%)など地袋と天袋だけで構成されているものをあわせると24件(46.2%)と半数近くある。また全般的傾向として、床脇には煎茶席飾りにおいて重要な文具が多く飾られている〔図1〕。

3 付書院

付書院は描写数が27席と少なく、席の性格・時代・地域による差異はみられない。しかし特殊な例として『分史翁薦事図録』(明治15年-1882)の第3席(前席)や第4席(茶席)のように、壁をなくして高欄が付けられ、開放



〔図1〕『分史翁薦事図録』 明治15年刊

〔表1〕棚の種類と描写数 (『雑工三編 大工棚雛型』等参照)

違 棚	錦葉棚	書物棚	文道棚
13件(25.0%)	8件(15.4%)	7件(13.5%)	6件(11.5%)
通 棚	鯨 棚	袋 棚	その他
5件(9.6%)	3件(3.8%)	2件(3.8%)	8件(15.4%)

的な空間を創り出しているものもある〔図1〕。また付書院も床脇同様に文具が多く飾られる傾向にある。

4 戸口

戸口の描写は196件ある。形状は大半が一般的な方形で、席の性格・時代・地域による差異はみられない。しかし特殊な例としては『直入翁寿醢図録』(明治13年-1880)や『煎茶式』(明治42年-1909)に火燈窓の形状をした戸口が描写されている。また建具がはずされて開放される傾向にあり、かわりに全体の6割以上の席に帳や簾がみえ〔図2〕、特に帳は中国的雰囲気をかもしだすのに

重要な要素となっている。帳は中国の百科事典『三才図会』(王圻、王思義 1607年)に「床帳」として見られるほか、日本の『和漢三才図会』(寺島良安 正徳2年-1712年)や『清俗紀聞』(中川忠英 寛政11年-1799)にも描写されており、このような中国の文物慣行に関する図集を参考にして、中国明・清様式の意匠を導入したと考えられる。

5 窓

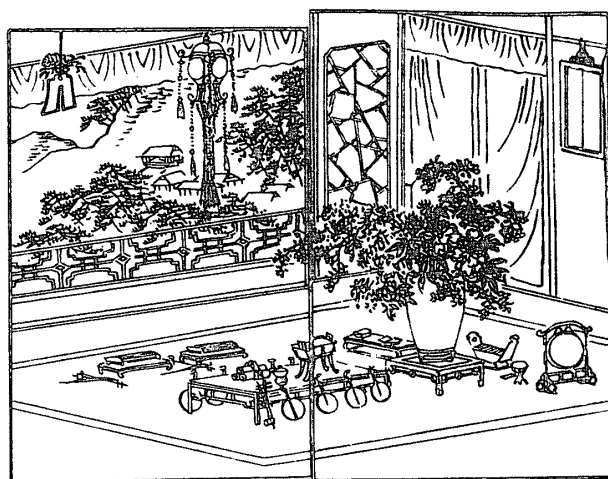
窓の描写は161件ある。窓の形状により〔表2〕のとおり方形・方形角切形・方形角丸形・円形・楕円形・その他に分類し、統計的分析を行なった。まず時代的には、全時代を通して方形が最も多く、江戸後期には方形が11件(73.3%)ある。しかし、明治前期には方形(39件-56.5%)が減少し、方形方形角切形(11件-17.4%)・方形角丸形(6件-9.5%)・円形(6件-9.5%)等の中国的な形状の比率が増加する。明治後期になると、さらに中国趣味を反映して、方形が21件(45.8%)と半数以下に減少し、かわって方形角丸形は17件(36.2%)に増加する。しかし大正期以降方形が24件(70.5%)と再び増加し、和風化する。また地域性についても全地域を通して方形が多く、東京(江戸)・大阪(大坂)では、方形がそれぞれ11件(55.0%)・62件(63.2%)と多く、和風の窓が好まれているのに対し、京都では方形19件(48.7%)と半数以下で、方形角切形(5件-12.8%)や方形角丸形(10件-25.6%)等の窓が東京(江戸)・大阪(大坂)より多くみられる。また、前席は茶席より方形が少なく、方形角切形・方形角丸形等が多いなど、席の性格によっても窓の形状に差異がみられる。なお、中国風の窓の格子には氷裂文様が多数みられる。

6 高欄

高欄の描写は47件ある。高欄は窓の形状や帳などとともに煎茶席の室内・立面意匠を構成する重要な要素である。全般的特徴として、卍崩し文様等中国文様のものが多い〔図3〕。これらの中国風意匠は中国造園書『園冶』(計無否 1635年)にみられ、また『新撰明治 欄間雛形』(明治16年-1883)などの「建具雛形」にも多数収録されている。

		意匠
『青湾茗齋図誌』(明治9年刊)	第1席(前席)	
	第1席(茶席)	
	第3席(茶席)	
	第4席(茶席)	
	第5席(茶席)	
	第8席(酒席)	
	第9席(茶席)	

〔図3〕高欄意匠例



〔図2〕『雲烟供養図録』 明治13年刊

〔表2〕窓の種類と形状

方形	方形角切形	方形角丸形
円形	楕円形	その他

むすび

幕末から大正にかけての煎茶の流行にともない、中国趣味を中心とした煎茶独特の室内意匠が発達した。これは売茶翁高遊外による煎茶の確立以降、中国文化に傾倒する文人たちによって煎茶が受け継がれてきたことに起因する。室内意匠を要素別に考察した結果、床・床脇・付書院については、席の性格・時代・地域による差異はなく、全般的に佛具・文具等が多く飾られる。戸口は開放され、帳や簾が吊られ、中国的な雰囲気をかもしだしている。窓の格子や高欄にも中国風意匠のものが多く描写されている。窓の形状においては、明治後期に中国風意匠の最盛期を迎え、以後和風化の傾向を示す。また前席では中国風の窓が好まれ、茶席では和風の窓が好まれるなど、席の性格・時代・地域による差異がみられる。以上煎茶席に特徴的にみられる中国風意匠は、中国や日本で刊行された中国の文物慣行に関する図集などをもとに導入されたと考えられる。

- 1) 北岡秀和 麓 和善『煎茶図録における煎茶席の構成と座敷飾りに関する考察』(日本建築学会大会学術講演梗概集 北海道 1995年)

*1 名古屋工業大学大学院生

*2 名古屋工業大学助教授・工学博士

Graduate student, Nagoya Institute of Technology

Assoc. prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.